

後期・邪馬台国の時代⑤

～スサノオと五十猛命～

河村哲夫

高天原を追放されたスサノオ

ところで、高天原を追放されたスサノオのことである。

彼は出雲にまっすぐ向かったのではなく、いったん朝鮮半島に渡っているようである。

『日本書紀』神代紀第四の一書には、追放されたスサノオは、息子の五十猛神(いたける)と共に新羅の「曾戸茂梨(ソシモリ)」に天降ったものの、「この地われ居ること欲さず」といって、土の船で東に渡り、出雲国斐伊川上流の「鳥上の峯」に到った後、八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を退治したと記されている。

スサノオが高天原を追放されたのは、天の岩戸の後——つまり天照大神の死後である。

『魏志倭人伝』は、卑弥呼の死後、「男王立つも、国中服せず」と記している。

その男王の名は書かれていないが、『古事記』『日本書紀』によれば、天照大神を天の岩戸に追い詰めたのは弟のスサノオと記されている。

よって、卑弥呼の死後の男王は、スサノオの可能性が高い。

ところが、「国中服せず。更に相誅殺す。当時千余人を殺す」という状態に陥り、結局、男王は王位を追われ、台与という 13 歳の女王が擁立されて動乱は収まった。

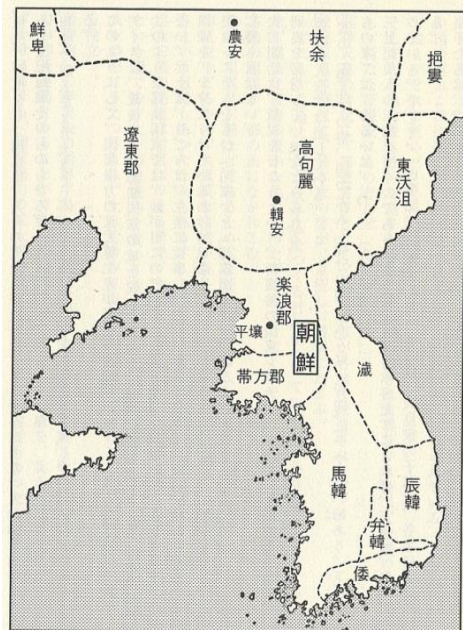
『古事記』『日本書紀』によれば、スサノオは全財産を没収され、高天原から追放されている。

男王は、248 年 9 月 5 日(中国暦では 8 月 1 日)の日食を口実に、王位を追われたのかもしれない——ということなどについては、すでに述べたとおりである。

したがって、日中の情報を総合的にみれば、スサノオが朝鮮に渡ったのは、248 年ということになる。

当時、新羅は建国されていず、いまだ辰韓の時代である。

地図3 「東夷伝」による諸民族の地理的位置



曾戸茂梨(ソシモリ)

その所在地について、現在の日本ではほとんど議論されることはない。

戦後、『古事記』『日本書紀』の神代紀に関する記述について、ことごとく歴史の世界から追放され、いわばおとぎ話やフィクションのごときレベルまで貶められ、曾戸茂梨(ソシモリ)に関しても、まともに議論されることもなくなってしまった。

むしろ強い関心をしめしているのは韓国側である。日本民族の起源や日本文化全般について朝鮮由来とみる朝鮮優越史観に基づき、曾戸茂梨(ソシモリ)に関しても実在説の立場から韓国の研究者が積極的に発言している。

説	内容	評価
(1) 高い柱の頂上説 (韓国元植梨花大学教授崔俊氏)	<ul style="list-style-type: none"> ・ソシモリは地名ではなく、「高い柱(ソシ)の頂上(モリ)」という意味である。牛頭天王の「牛」は「ソ(シ)」という音にあたる漢字を当てはめたものである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スサノオを牛頭天王とみるのは、仏教伝来後の本地垂迹説 ・現代韓国語と古代朝鮮語との関係がほとんど解明されていない状況下においては無意味
(2) 高霊説 (韓国慶尚北道高霊の郷土史研究家金道允氏)	<ul style="list-style-type: none"> ・高霊にはその昔『ソシモリ山』という山が実在していた。加耶山である。 ・仏教伝来以前は「牛の頭の山」と呼ばれていた。牛の頭は韓国語の読みではソシモリ。牛の頭の山と呼ばれたのは、加耶山麓の白雲里という村の方から見た時、山全体が大きな牛が座っているように見えるからである。 ・白雲里には高天原という地名もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・加耶山は仏教伝来以前の加羅や伽耶など古い国名に由来 ・スサノオを牛頭大王とみる仏教伝来後の本地垂迹説 ・ただし、高霊はもとの大加羅国であり、倭国と深い関係があったことから、曾戸茂梨(ソシモリ)の候補地の一つに数えることは可能か
(3) 江原道春川説 (戦前の有力説) 吉田東伍『古代半島諸国興廢概考』【1891年(明治24年)8月号『史学会雑誌』】)	<ul style="list-style-type: none"> ・曾戸茂梨(ソシモリ)は江原道春川の牛頭山。春秋戦国時代の西暦紀元前4世紀と推定。 ・この説に基づき、1918年(大正7)牛頭山に朝鮮様式の江原神社がつくられ、1941年(昭和16)10月1日に国幣小社とされた。もちろん、現在は完全撤去されている。 ・山頂には、「高天原由緒所定地」と書かれた石碑も建てられていたというが、これまた完全撤去されている。 現地には、スサノオが50人の兵士と妹を連れて出雲へ渡ったという伝承があったというが真偽不明。五十人の兵士とは五十猛命のことか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上記2説と同じく仏教伝来後のスサノオ＝牛頭天王説 ・濊の領域であるという根本的な問題

			
(4)	<p>新羅説 (『日本書紀』岩波書店)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・尸(シ)は助詞で、曾尸茂梨の曾茂梨とは新羅の原号であった徐羅伐(ソラブル)すなわち「ソの国のフル」の意で、現代語のソウル(首都)のことであり、慶州のことである。 ・平安時代の『日本書紀』の勉強会で、惟良宿禰高尚がソシモリを今の「蘇之保留」と解説し、「この説はなはだ驚くべし」としている。 ・徐羅伐は sio-ia-por であり、sio は「金」、ia は「ある所」、por は日本語の「フレ=村」の意で、「金のある村」という意味の古語である。新羅も「シラ」を金、「キ」を部落として同義である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古代朝鮮語の実態は不明で、現代朝鮮語との関係もよくわかっていない。
(5)	<p>濟州島説 (日根輝己氏『倭国・闇からの光』アイベック)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・濟州島の東の洞窟のある小島にある山が「ソシモリ」と呼ばれている。 ・祇園祭りの山鉦巡行のルーツは南インド・タミール地方のクマリ信仰で、クマリを祀った有名な寺がインド最南端のコモリン岬にあり、ここに牛頭山のルーツであるマラヤ山がある。『大唐西域記』にマラヤ山について「高い崖に峻しい峰、洞穴の様な谷に深い谷川がある」などと記されている。このような景色は、日本では熊野地方(花窟神社)や南朝鮮の海岸、濟州島の東の小島などがよく似ている。山中の春川や高霊はこの景色に当たらない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・濟州島は新羅に属しない。 ・新羅の国に天降ったとする『日本書紀』の記事に合致しない。

(6)	渡来朝鮮族の日本国内集落説 (橋本犀之助氏『日本神話と近江』古代近江研究会)	<ul style="list-style-type: none"> ・曾戸茂梨は熊曾の曾と筑紫の紫をとって「曾紫」すなわち「曾戸」としたものである。 ・茂梨はすなわち「森」、森は「叢」で「村」の意味である。 ・「新羅の曾戸茂梨」は新羅の曾戸茂梨という土地を指しているものではなく、新しく渡来して来た朝鮮民族の村々のことである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新羅の国に天降ったとする『日本書紀』の記事に合致しない。 ・九州が朝鮮民族に支配されたとする戦後流行の自虐史観
(7)	慶尚南道熊川説 (鮎貝房之進氏『日本書紀朝鮮地名考』国書刊行会)	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>曾戸茂梨は新羅領域内にあり、かつ海岸に近いはず。</u> ・この地には「天子峰」という山があり、昔日本の高官と情を交わした乙女が別離ののち悲嘆のあまり化したと伝えられる巨岩がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天子峰と曾戸茂梨(ソシモリ)を結び付ける根拠なし。 ・日本の高官＝スサノオの根拠なし。
(8)	ソシ山説 (安本美典氏『日本語の起源を探る』徳間書店)	<ul style="list-style-type: none"> ・古代朝鮮語において、<u>山は「ムレ」あるいは「モリ」と発音</u>(『日本書紀』では、朝鮮の「山」を、「ムレ」「モロ」と読ませている) ・「ムレ」「モロ」の例 「辟支の山(へきのむれ)」「古沙の山(こさのむれ)」「谷那の鉄の山(こくなのかねのむれ)」「いづれも百済の山」 ・「帯山の城(しとろもろのさし)」「顕宗天皇紀)」、 「久礼山(くれむれ)」「(欽明天皇紀)」、 「怒受利の山(のずりのむれ)」「任射岐の山(にぎぎのむれ)」「 北の任叙利の山(にじよりのむれ)」「都都岐留の山(つつきるのむれ)」「(以上、「齊明天皇紀)」 ・現代朝鮮語では、「山」のことを「san」というが、これは中国語からの借用語 ・日本語は伝統的に山(yama) 	<ul style="list-style-type: none"> ・『日本書紀』による言語学的な分析は秀逸 ・ただし、ソシ山の具体的な場所は不明。

以上の説のうち、

(7)鮎貝房之進氏の「曾戸茂梨(ソシモリ)は新羅領域内にあり、かつ海岸に近いはず」とする説

(8)安本美典氏の「曾戸(ソシ)+茂梨(モリ)=曾戸(ソシ)+山(モイ)」とするソシ山説

が有力とみられるが、いずれも特定の場所を提示する説ではない。

これら二つの説をもとに、旧新羅の領域内の海岸に近い「ソシ山」を古い記録や伝承のなかから見つけ出し、さらには考古学的な見地から朝鮮半島南部の弥生遺跡などを考慮する必要がある。

さらには、『日本書紀』神代篇の第五の一書には「韓郷(からくに)の嶋」とも書かれていることから、朝鮮半島南部の島々についても検討対象に含めるべきかもしれない。

朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉

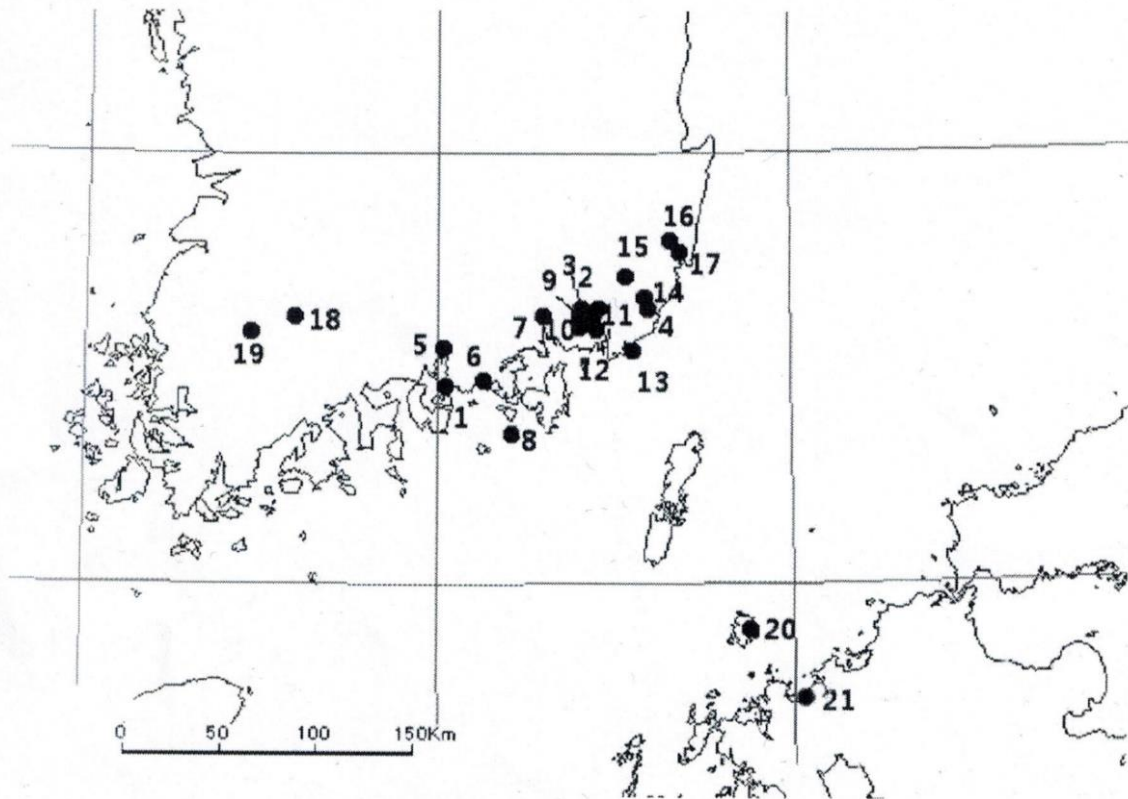


図1 朝鮮半島弥生系土器出土主要遺跡分布図

弥生遺跡は、島々も含め、朝鮮半島南岸地域に分布している。

石丸あゆみ氏は「朝鮮半島出土弥生系土器から復元する日韓交渉」のなかで、

「壱岐では、遠賀川以東系、中九州系、山陰系の弥生時代中期段階の土器も複数出土し、原ノ辻と同様に(韓国の)勒島遺跡出土のⅡ期段階の資料中にも、遠賀川以東系や山陰系の土器が含まれていることが明らかとなっている。

Ⅱ期は、原ノ辻遺跡と勒島遺跡を結ぶ交易ルートを利用し、糸島地域をはじめとした北部九州の地域集団が主体となり積極的に朝鮮半島と勒島を通じた楽浪郡との交易をおこなっていた時期であり、その交渉には中九州・山陰地域の集団も、直接的に関わっていたと考えられる」

と記されている。

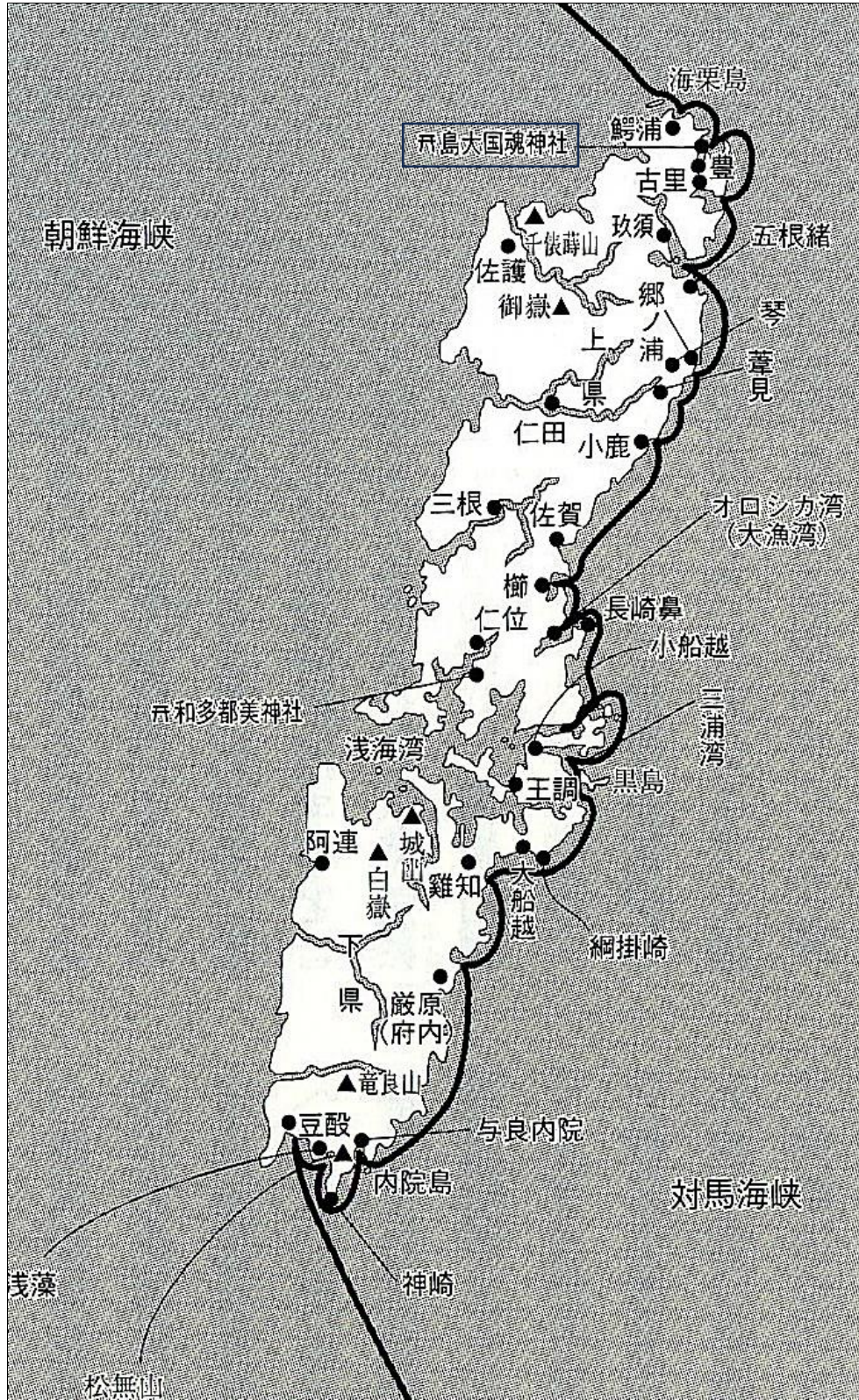
壱岐の原ノ辻遺跡と朝鮮半島の勒島遺跡に着目した論考ではあるが、北部九州の地域集団とともに、中九州や山陰地域——すなわち、出雲の集団が朝鮮半島と直接的に交易を行っていたことが指摘されている。

今後の調査の進展によって、朝鮮半島における山陰系集団の活動領域が明らかになることを期待したい。

対馬の伝承

対馬北端の豊にシレイと呼ばれる小さな島がある。シレイの意味は不詳であるが、陸地から島につながった砂州は「不通浜(とおらずがはま)」と呼ばれて、人の立ち入りが禁じられており、立ち入ると、大風・腹痛・災害など不吉なことが起こるとされている。





神功皇后伝承地(往路)

「島大国魂神社」(対馬市上対馬町大字豊字シレイ)は、島首大明神・島頭大明神とも呼ばれたという。延喜式内社とされているが、木造の社殿などはまったくなく、島全体が神域とされ、白水(しろみず)山と呼ばれる丘の下に石碑があるだけである。白水山には老人が住んでおり、そこで見聞きしたことを他言すると死んでしまうという伝承がある。沖ノ島にも通じるタブーの島である。

祭神はスサノオである。社伝によれば、子の五十猛命とともに韓の曾尺茂梨(ソシモリ)の地へ渡った時の行宮の跡と伝えられる(『角川日本地名辞典』)。

ただし、延喜式内社 29 社はじめ、対馬の社伝については江戸期の対馬国総宮司職の家系である藤仲郷(とうなかさと・1733～1800)によって、かなり大幅な加工・整理が行われた形跡があるから、それらをもとに考証を進めると、やや本道を踏みはずす恐れがあるから注意しなければならない。

島大国魂についても、祭神はスサノオではなく、対馬固有の国魂神のことであり、『古事記』の国生み神話に登場する天之狭手依姫(あめのさでよりひめ)(対馬の別称)のこととする説もある。

島大国魂神社についても、藤仲郷及びその結果を踏襲した『津島紀事』(平山東山著、鈴木棠三編・1973)は、島頭(しまのこうべ)神社、若宮神社、那祖神社の三社を合わせたものが島大国魂神社であるとし、『津島紀略』(陶山訥庵・1821)は、上県町の御岳(みたけ)(479メートル)の神こそ島大国魂神とする。御岳は、もと下県郡の天道山と同じく対馬における天道信仰の霊地である。

このように、シレイ島を延喜式内社の「島大国魂神社」とみる説が多数ではあるものの、その祭神や所在地について、異論がくすぶりつづけている。

なお、上県町佐須奈字日吉乙には、大己貴命——すなわち、大国主命を祭る「島大国御魂御子神社」があり、延喜式内社の「嶋大国魂神御子神社」に比定されているが、これまた下県の豊玉町の島御子神社(豊玉町曾蔭在所)を有力とする説も唱えられている。

とはいえ、『日本書紀』の曾戸茂梨(ソシモリ)の記事が正しいとすれば、スサノオは当然対馬を経由しているはずである。

そういう意味では、対馬にスサノオ伝承が残されていること自体が、きわめて貴重であることに変わりはない。

植林の神

スサノオと五十猛命は、曾戸茂梨(ソシモリ)に渡ったとき、樹木の種を持参していたという。

『日本書紀』神代編第四の一書は、

「初め五十猛神、天降ります時に、多(さわ)に樹種を將(も)ちて下る。しかれども、韓地には植えずして、尽(ことごと)に持ち帰る。遂に筑紫より始めて、すべて大八洲(おおやしま)国の内に、播殖(まきおお)して青山に成さずということなし。このゆえに、五十猛命を名づけて、有功(いさおし)の神とす。即ち紀伊国に所坐(ましま)す大神是(これ)なり」

と書いている。

朝鮮に渡ったものの、樹木の種を植えずに持ち帰り、筑紫で植林を始めて大八洲(おおやしま)国——すなわち、日本列島全体に植林を行ない、緑豊かな国土を築いた。

筑紫神社(福岡県筑紫野市原田)には、筑紫神が祭られており、白日別神あるいは五十猛命とみる説があるのは、この『日本書紀』の記事に基づく。

筑紫から全国に植林を広めた有功(いさおし・功績)により、五十猛命は「紀伊国に所坐(ましま)す大神」として、紀伊国一の宮の「伊太祁曾(いたきそ)神社」(和歌山市伊太祈曾)に祭られている。主祭神は五十猛命で、妹の大屋都比売命と都麻津比売命も祭られている。

社伝によれば、伊太祁曾神社は、古くは現在の日前宮(日前神宮・国懸神宮)の地(和歌山市秋月)に祭られていたというが、垂仁天皇 16 年に日前神・国懸神が祭られることになったことから移転したという。『古語拾遺』によれば、日前宮(日前神宮・国懸神宮)は、八咫鏡の試作品各一面を御神体とする。

旧地を明け渡した伊太祁曾神社は、和銅 6 年(713)に現在地に遷座したと伝わる。

さらに、『日本書紀』神代紀第五の一書は、

「素戔鳴尊(スサノオ)曰(のたま)はく、『韓郷(からくに)の嶋には、これ金銀あり。たとい吾が児の所御(しら)す国に、浮宝(うくたから・船)有らずは、いまだ佳(よ)からじ』とのたまひて、すなわち鬚髯(ひげ)を抜きて散(あか)つ。即ち杉(スギ)に成る。また胸の毛を抜き散つ。これ檜(ヒノキ)に成る。尻の毛はこれ椈(マキ)に成る。眉の毛は椴(クス)に成る。すでにしてその用いるべきものを定む。乃ち称(ことあげ)して曰く、『杉および椴(クス)、この両(ふたつ)の樹は、もって浮宝(船)とすべし。檜(ヒノキ)はもって瑞宮(みつのみや・宮殿)をつくる材にすべし。椈(マキ)はもって顕見蒼生(うつしきあおひとくさ・人間)の奥津棄戸(おきつすたへ・棺)に将(も)ち臥(ふ)さむ具(そなえ)にすべし。その噉(くら)ふべき八十木種(やそこだね)、皆よく播(ほどこ)し生(う)う』とのたまふ。時に素戔鳴尊(スサノオ)の子を号(なづ)けて五十猛命と曰(もう)す。妹大屋津(おおやつ)姫命、次に爪津(つまつ)姫命。すべてこの三柱の神、またよく木種を分布(まきほどこ)す。即ち、紀伊国に渡し奉る。然して後に、素戔鳴尊(スサノオ)、熊成峯(くまなりのたけ)に居(ま)しまして、遂に根国(ねのくに)に入りましき」

と記す。

樹木の種類とその用途は次のとおり。

順序	種類	用途	備考
① 顔鬚	杉(スギ)	浮宝(船)	・船材に限らず多用途に利用される木材
② 胸毛	檜(ヒノキ)	瑞宮(宮殿)	・神社などの建材としても高品質とされる。
③ 尻毛	椈(マキ)	奥津棄戸 (おきつすたへ) (木棺)	・耐水性に優れているため、風呂桶、寿司桶などに用いられる。 ・古墳時代の木棺もコウヤマキが多い。 ・百済の武寧王の棺も日本から贈呈されたとみられるコウヤマキが使われている。
④ 眉毛	椴(クス)	浮宝(船)	・クスノキを用いた古墳時代の船が多数出土している。 ・『古事記』『仁徳記』にもクスノキ製の快速船「枯野」が登場

五十猛命の逸話は、古代日本において、植林が行われていたことをしめすものであろう。

縄文時代からの伝統かもしれないが、世界的にもきわめて稀有な植林伝承であろう。

現在でも、日本は森林大国で、森林面積は約 2500 万ヘクタールで、国土面積の 67%、3 分の 2 を占めている。

なお、スサノオの子、すなわち五十猛命の妹二人が紹介されていることも注目される。

兄	五十猛命	<ul style="list-style-type: none">・『先代旧事本紀』分注に「亦云、大屋彦神」とある。・『古事記』で大穴牟遲神(大国主命)が逃げ込んだ木(紀伊)国の大屋毘古神と同一神とする説あり。・伊太祁曾神社(和歌山市伊太祈曾)の主祭神
妹	大屋津(おおやつ)姫命	<ul style="list-style-type: none">・樹木の女神とされる。・兄の大屋彦神(五十猛命)とも通じる。・伊太祁曾神社(和歌山市伊太祈曾)の祭神・大屋都姫神社(和歌山市宇田森)の祭神
妹	爪津(つまつ)姫命	<ul style="list-style-type: none">・樹木の女神とされる。・伊太祁曾神社(和歌山市伊太祈曾)の祭神・都麻津姫神社(和歌山市吉礼)の祭神・都麻都姫神社(和歌山市平尾)の祭神

九州におけるスサノオの拠点

高天原を追放されたスサノオは最終的に出雲に向かったが、スサノオは九州のどこを拠点にしていたのか——この点に関して述べたいとおもう。

遠賀郡岡垣町大字高倉に「高倉神社」がある。

祭神は大倉主命と菟夫羅媛命(つぶらひめ)で、『日本書紀』仲哀天皇紀にも登場する。

『日本書紀』によると、豊浦宮(下関市長府の忌宮神社)を船で出発した仲哀天皇は、関門海峡を渡り、響灘から山鹿岬(やまかのさき)を回航して遠賀川河口の岡浦に入った。

山鹿岬とは、現在の北九州市若松区岩屋にある遠見ノ鼻(妙見崎)のことである。もともとは山鹿郷に属していた。

ところが、仲哀天皇の船が山鹿岬を回って岡浦に入ったところで、いきなり船が進むことができなくなった。

仲哀天皇は水先案内を勤めていた地元の豪族熊罴に向かって、「熊罴は清らかな心でやってきたのに、どうして船は進まないのか」となじると、熊罴は、「お船が進まない理由は、臣の罪ではございません。この浦のほとりに、男女の二神があり、男神を大倉主(おおくらぬし)と申し、女神を菟夫羅媛(つぶらひめ)と申します。おそらくこの神のせいでもあります」と弁明した。

仲哀天皇は迎えにきた熊罴の心がけに何らかの原因がないかと疑い、熊罴は男女二神のせいであると切り返したわけである。熊罴の申し立ては仲哀天皇に受け入れられた。

『日本書紀』によると、「挟抄者倭国(かじとりやまとのくに)の菟田(うだ)の人伊賀彦(いがひこ)をもって祝(はふり)として祭らせたまふ」とある。

「挟抄」は梶取りという意味であり、「菟田」は奈良県宇陀郡のことである。「祝」とは、けがれを祓い清める者のことである。「放(はふる)や「屠(はふる)」と同根といわれるから、いけにえを捧げて祈ったのであろう。

船の航行を妨げたのは大倉主命と菟夫羅媛というペア神であった。

この二神が前述の高倉神社の祭神であるが、遠賀川河口の岡湊(おかのみなど)神社(遠賀郡芦屋町)の祭神でもある。高倉神社が本宮で、岡湊神社は下宮とされる。

高倉神社が所在する村は、かつて遠賀郡高倉村と呼ばれた。



この高倉という地名に関して、『岡垣小史』(長畑武岡・1984)は、

「高倉という地名は高床式の穀物倉に由来し、支配者の存在を示唆するものであり、丘陵には円墳が点在するなど、弥生時代の遺跡も豊富であって、おそらく古い時代に大倉主という地方豪族が高倉を根拠に遠賀地方を支配していたのであろう」

とする。

大倉は、後世の文献によっては大蔵と書かれることもある。高倉の貯蔵物や財物の管理・支配権を有した者のことを大倉主命と呼んだのであろう。

『日本書紀』には大倉主命と菟夫羅媛の出自についてまったく記載がないが、貝原益軒の『筑前国続風土記』によると、熊手村(北九州市八幡西区)の海辺に大蔵神社という小さな神社があり、こ

これは「スサノオの御子の大蔵の神を祭る所」であるという。

そして、伊藤常足の『太宰管内志』によれば、大倉主は高津峰に天降った神であるという。企救郡に高津尾(小倉南区)というところがあり、近くには高蔵山(標高 357メートル)があるから、遠賀川下流の遠賀郡から企救郡一帯を治めていた人物なのであろう。

以上の伝承を総合すれば、高倉神社と岡湊神社の祭神とされるスサノオの子の大倉主命は、企救郡から遠賀川河口付近までを支配していた古代国王であった可能性がある。



菟夫羅媛は大倉主の妃か姉妹か不詳ではあるが、いずれにしても大倉主命とペアでこの地方を治めたのであろう。

スサノオの子の大倉主命が企救郡と遠賀郡に拠点置いていたとすれば、それはすなわち父のスサノオの拠点でもあり、出雲族の九州における拠点である。宗像にも近い。天照大神との誓約(うけひ)によって、宗像三女神を得たとする伝承とも符合する。

以上により、スサノオの拠点の第一候補は、企救郡と遠賀郡というべきであろう。

嘉穂郡の伝承

もう一つの候補は、嘉穂郡(嘉麻郡・穂波郡)である。

すでに述べたように、スサノオの子の五十猛命は、またの名を大屋彦命という(『先代旧事本紀』は大屋彦神、『古事記』は大屋毘古神)。

この大屋彦命の末裔とされる八田彦という人物の伝承が嘉穂郡各地に残っているのである。

神武天皇の東遷については、ずっと先のほうで述べることとしているが、『古事記』『日本書紀』と異なり、福岡県の伝承では、神武天皇は、

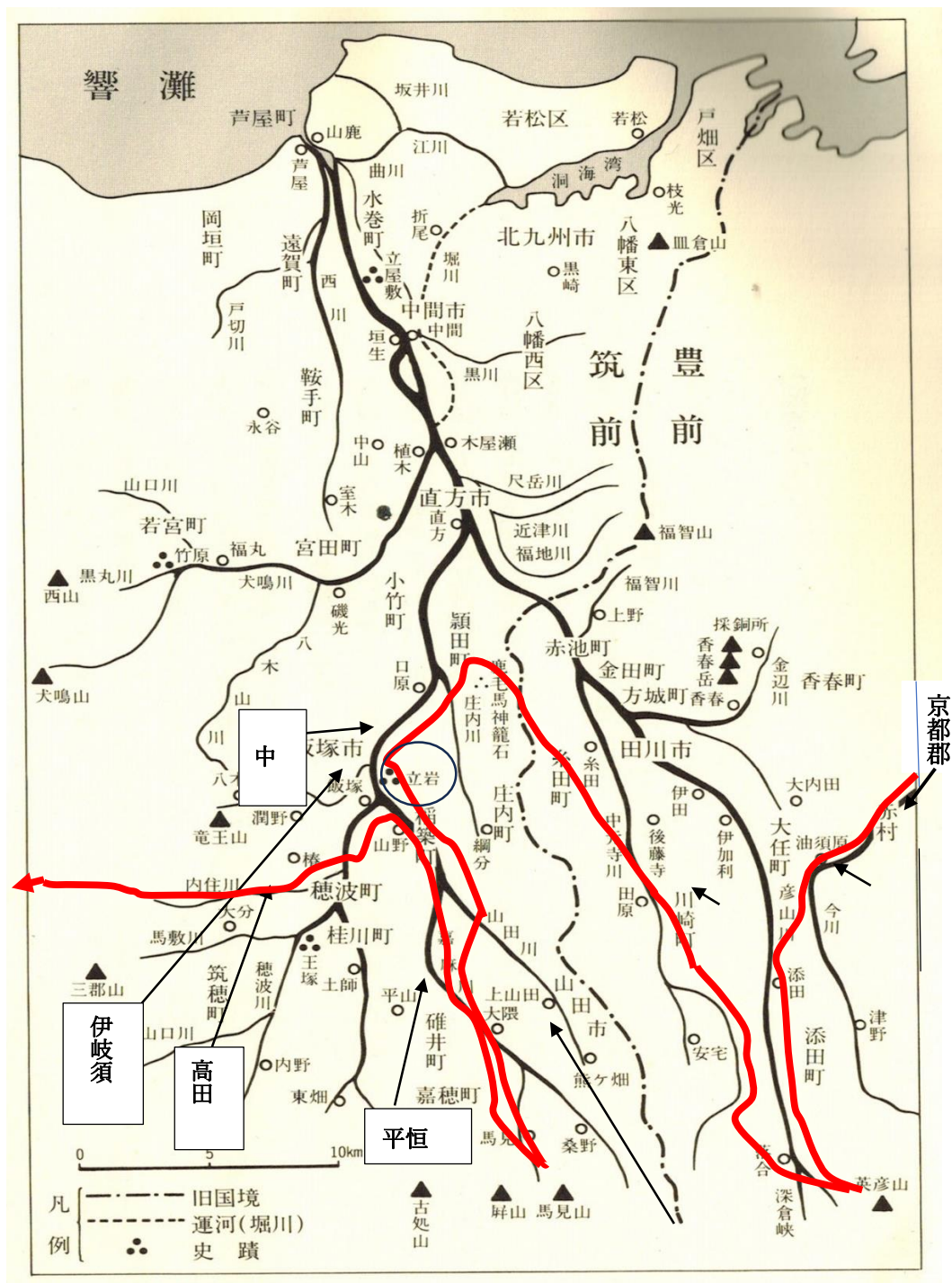
【宇佐→京都平野→英彦山→田川郡→嘉穂郡→御笠郡→糟屋郡→宗像郡・赤間→崗の津→関門海峡→安芸(広島)】

と、福岡県内陸部を經由し、遠賀川河口の崗の津から関門海峡を越えて近畿に向かったとされる。

そのとき、神武天皇一行を出迎えて身辺警護に努めた八田彦なる人物は、大屋彦命の末裔であったという。

嘉穂郡の神武天皇伝承

伝承の内容	備考
<p>撃鼓(げきこ)神社(飯塚市中)の社伝 この地で風雨のため前に進めなくなり、<u>八田彦</u>は白旗山山頂の天照大神を祭るよう進言した。すると、天照大神は筑紫国を抑えた後に近畿に向かうよう告げたという。</p>	<p>八田彦は嘉麻郡の豪族。 <u>大屋毘古</u>の末裔という。</p>
<p>熊野神社(飯塚市立岩)の社伝 ・神武天皇は激しい風雨に襲われ、祖先の神々に祈ると天から雷光とともに巨岩が降ってきて大地に突き立って雨がやみ、戦いに勝ったという。 ・<u>八田彦</u>とその一族が神武天皇らを出迎え、銚を河中に突立て浅瀬の標として、無事に渡ることができた。 ・天皇は<u>八田彦</u>の案内で遠賀川を渡り、片島の里に上陸した。 ・王渡、徒歩渡、銚の本、勝負坂等の地名あり。</p>	
<p>伊岐須神社(飯塚市伊岐須)の社伝 ・神武天皇が天照大神とスサノオを祭った。よって神武村、神武山という。</p>	
<p>高宮八幡(飯塚市伊岐須)の社伝 ・神武天皇が滞在したためこの地を神武という。 ・大屋毘古の裔の<u>八田彦</u>が多く一族とともに出迎えた。 ・神武天皇は<u>八田彦</u>の進言に従い、天照大神を東北の岩戸山に祭り、小石をこの山の頂に立てスサノオを祭った。よってこの村を神武村、山の名を神武山という。</p>	
<p>宝満神社(飯塚市平恒)の社伝 天皇は<u>八田彦</u>の案内で、潤野の地に進み、改めて天祖の御霊を祭った。その地は「姿見」といい、「日の原」ともいう。このとき天照大神から「九州平定後東征すべし」との託宣を受けた。</p>	
<p>高祖神社(飯塚市高田)——もと高田神宮皇祖廟の社伝 ・天皇は高田に進み、<u>八田彦</u>の伴った<u>田中熊別</u>に迎えられ、根智山の打猿を討伐するため、高田の丘から<u>田中熊別</u>と<u>椎根津彦</u>に命令を下された。この地に神武天皇と玉依姫を祭ったのが高祖神社である(もと高田神宮皇祖廟)。</p>	<p>田中熊別は大山祇命の末裔という。 大山祇命はクシナダヒメ(スサノオ)の父か？</p>
<p>高田神宮皇祖廟(飯塚市高田)の社伝 ・大山祇命の裔の<u>田中熊別</u>が天皇を出迎えた。 ・<u>田中熊別</u>は<u>椎根津彦</u>とともに賊を平定する決意を述べた。<u>椎根津彦</u>が総大将となり、内野の川上で賊軍を打ち破り、これを追撃した。その勝報が高田丘に伝わったので、天皇は山口に進軍した。その間に打猿は捕らえられて斬首された。この誅戮の地を打首といい、今なまって牛頸という。</p>	



大屋彦命=五十猛命であるとすれば、スサノオの拠点的な地域は嘉穂郡にあった可能性もあり得る。スサノオの妃となるクシナダヒメの父とみられる大山祇命とその末裔とされる田中熊別の伝承もある。飯塚市伊岐須の伝承では、スサノオが祭られている。

ただし、(一)大屋彦命=五十猛命が絶対確実であるか、(二)隼人の祖で木花咲耶姫の父とされる大山祇命との関係はどうなのか、(三)大山祇命と田中熊別の関係はどうなのかなど、さまざまな疑問点が存在することは確かである。

しかしながら、地域伝承が急速に絶滅に向かって進んでいる現状に思いを致せば、その精度に関して問題があったとしても、意図的に書き残して後世に委ねることに意味があるかもしれない。

そういう観点から、このような駄文を書き連ねることを、どうかお許しいただきたい。

田川市の伝承

福岡県田川市に伊田という地名がある。

風治八幡神社(田川市魚町)の祭神・伊田大神に由来する。



風治八幡神社は神功皇后の伝承地で、神功皇后腰掛石などもあるが、勇壮な川渡り神幸祭で有名である。

風治八幡神社の由緒は次のとおり。

「伊田大神は海津見神(わたつみのかみ)という地主神で、神功皇后の朝鮮出兵の際に、筑紫から穴門の豊浦宮(山口県下関市)に御帰還の際、暴風雨が起ったため、この神社の前の大石に腰を掛けられ(腰掛石の由来)、身に帯びられた太刀を献上されて、天神地祇および伊田大神に祈願なされたところ、暴風雨がたちまち治まり、無事に穴門にご到着されたという。

時代は下って、平安時代の弘仁五年(814)六月の大旱魃によって、五穀がことごとく枯死しようとした。このため(田川)郡司が伝教大師(最澄)にお願いして伊田大神に祈念させたところ、恵みの雨が降って五穀が豊かに実った」

この由緒によると、伊田大神＝海津見神(わたつみのかみ)という地主神とされている。ワタツミの神といえば、イザナギの禊によって生まれたワタツミ三神のことで、博多湾の志賀島を本拠とする阿曇一族の氏神である。

しかしながら、イダテの神は、五十猛命・伊太氏神・伊達神・伊太神・射楯大神・伊太祁曾神などとして、各地で祭られている。「イタ」あるいは「イダ」という発音を共有している。

よって、田川市伊田の風治八幡神社で祭られている伊田大神も、五十猛命である可能性がきわめて高いという推論になる。

すなわち、五十猛命およびスサノオの九州における拠点が豊前国田川郡あたりにあった可能性もあり得る。

文献・社伝	祭神	概要
『播磨国風土記』飾磨郡因達(いたて)里	伊太氏神	「因達と称ふは、息長帯比売命(神功皇后)韓国を平(ことむ)けむと欲して、渡りまし時、船前(ふなさき)に御(ま)す伊太氏(いたて)の神、ここにましき。故、神の名に因りて里の名と為しき」
中臣印達(いたて)神社 (兵庫県たつの市揖保町中臣)	五十猛命	・式内社「中臣印達神社・播磨国揖保郡」
射楯兵主(いたて・ひょうず)神社 (兵庫県姫路市)	射楯大神 (五十猛命)	・『播磨国風土記』「伊太氏神(射楯神)」 ・兵主大神(=伊和大神、大国主命) ・延喜式「射楯兵主神社」
伊太祁曾神社(和歌山市伊太祈曾)	五十猛命	・伊太祁曾(いたきそ) = 五十猛命(いたける) ・妹の大屋都比売命と都麻津比売命も祭神
伊達(いたて)神社(和歌山市園部)	五十猛命	・神武天皇の皇子の神八井耳命も祭る。 ・延喜式「伊達神社・名神大・紀伊国名草郡」
『住吉大社神代記』	伊達神	・住吉大社撰社の「船玉神社」が紀氏の氏神で、「志麻神・静火神・伊達神」の本社とする。
稲根神社(東京都御蔵島村里)	五十猛命	・延喜式「伊達神社・伊豆国加茂郡」 ・伊大弓和気命神社
伊達神社(宮城県加美郡色麻町)	五十猛命	・延喜式「伊達神社・名神大・陸奥国色麻郡」 ・延暦年間(782~806)に坂上田村麻呂の東征の折に勧請されたという。一説には、この地にやってきた播磨国飾磨郡の人々が飾磨郡伊達の射楯兵主神社から射楯大神(五十猛神)を勧請したともいう。
韓国伊太氏神社(松江市玉湯町玉造・玉作湯神社)	五十猛命	・延喜式「韓国伊太氏神社・出雲国意宇郡」
揖夜神社(松江市東出雲町揖屋)	五十猛命	・『出雲国風土記』在神祇官社「伊布夜社」 ・延喜式「同社坐韓国伊太氏神社」
佐久多神社(松江市宍道町上来待)	五十猛命	・『出雲国風土記』「佐久多社」 ・延喜式「佐久多神社・出雲国意宇郡」 ・延喜式「同社坐韓国伊太弓神社・出雲国意宇郡」

嘉羅久利神社(安来市広瀬町広瀬)	五十猛命	<ul style="list-style-type: none"> 『出雲国風土記』「佐久多社」 延喜式「佐久多神社・出雲国意宇郡」 延喜式「同社坐韓国伊太弓神社・出雲国意宇郡」
阿須伎神社(出雲市大社町遙堪)	五十猛命	<ul style="list-style-type: none"> 『出雲国風土記』「阿受伎社」 延喜式「阿須伎神社・出雲国出雲郡」 阿須伎神社と称する社が、『出雲国風土記』に38社、『延喜式』に11社あり。阿遲須伎高日古根命を祭る。 延喜式「同社神韓国伊太氏神社・出雲国出雲郡」
諏訪神社(出雲市別所町)	五十猛命	<ul style="list-style-type: none"> 延喜式「出雲神社・出雲国出雲郡」 延喜式「同社坐韓国伊太氏神社・出雲国出雲郡」
曾枳能夜(そぎのや)神社 (出雲市斐川町神永)	五十猛命	<ul style="list-style-type: none"> 『出雲国風土記』「曾枳能夜社」 仏経山(曾枳能夜神社の奥宮跡) 伎比佐加美高日子命＝出雲国造 14 代伎比佐加美 延喜式「曾枳能夜神社・出雲国出雲郡」 延喜式「同社坐韓国伊太氏神社・出雲国出雲郡」

宇佐の伝承

さらにいえば、宇佐の古代豪族宇佐氏はタカミムスビ系統であるが、かつて宇佐八幡宮(大分県宇佐市)の社家のひとつであった辛島氏(からしま)は五十猛命の末裔とされている。

【宇佐氏系図】(『古代豪族系図集覧』)

高皇産靈尊(タカミムスビ)——天三降命——菟狭津彦命——常津彦命(宇佐君祖)——

【辛島氏系図】(『宇佐神宮史』)

スサノオ——五十猛神——豊津彦——都万津彦——曾於津彦——身於津彦——照彦——志津喜彦——児湯彦——諸豆彦——宇豆彦——辛嶋勝乙目(敏達天皇御宇任祝職奉仕)

辛島は辛嶋あるいは韓嶋とも書かれ、宇佐神宮から4キロほど西の宇佐郡辛島郷(宇佐市の辛島・樋田・中原)を拠点とした一族である。天皇から賜った姓(かばね)は勝(すぐり・村主)である。

韓嶋および村主からみて、帰化人系氏族とみる説も根強く、前述したとおり、スサノオと五十猛命は朝鮮半島と往来していたことは確かであるが、だからといって短絡的に渡来系とみるのは戦後独特の悪しき風潮であろう。スサノオは高天原(筑紫)のイザナギと出雲のイザナミの子、五十猛命はスサノオと高天原(筑紫)の母との間に生まれた子——とみて、何の問題もない。

それはともかくとして、宇佐についても五十猛命の活動領域に属していた可能性がある。

以上をまとめると、スサノオや五十猛命など出雲族の北部九州における拠点的な地域の候補は次のとおりとなる。

候補地		概要	評価
① 説	遠賀郡・企救郡	・高倉神社と岡湊神社の祭神とされる大倉主命はスサノオの子 ・企救郡・遠賀郡を支配	・出雲との海上交通の利便性 ・宗像と近接
② 説	嘉穂郡	・神武天皇時代の八田彦は大屋彦命＝五十猛命の末裔 ・田中熊別は大山祇命(クシナダヒメの父か)の末裔	福岡平野・筑紫平野と隔てられた独立性の保持
③ 説	豊前田川郡	風治八幡神社の祭神は伊田大神＝五十猛命	響灘・豊前海による海上交通の利便性
③ 説	豊前宇佐郡	宇佐の辛島郷を拠点とした辛島氏は五十猛命の末裔	豊前海による海上交通の利便性

九州と出雲の海上交通が【響灘～日本海】コースであることを考えると、船の発着に便利な企救郡(北九州市)・遠賀郡(芦屋町・岡垣町など)・宗像郡あたりの響灘沿岸地域が最もふさわしい。

そして、筑紫平野に卑弥呼の拠点があったとすれば、宗像から西に進んで博多湾のいずれかの場所に拠点的な港を確保する方法も選択肢の一つであろう。

あるいは、遠賀川を上って、嘉麻地方や田川地方から山越えて筑紫平野に向かう方法も有力な選択肢である。

さらには、関門海峡を下って周防灘に出て、行橋・宇佐方面など豊前・豊後方面のクニグニと交流を図ることもごく自然な流れである。

壱岐の人々の九州での拠点

福岡市西区に「生(いき)の松原」という海岸がある。

その中央部に壱岐神社(福岡市西区生の松原)があり、壱岐真根子を祭っている。武内宿禰の身代わりで自決した中臣系の壱岐の統治者である。すなわち、「生(いき)」という地名は、壱岐に由来する。何故か。壱岐の島から九州を訪れた人々の寄留地がこの地であったからである。

神社境内からは鉄滓も出土する。武器や生活用具・漁具なども自給自足的に製造していたのであろう。

現代と違って電話一本でホテルを予約することができない時代には、みずからの力で寄留地を確保しなければならない。



壱岐の人々とおなじく、出雲の人々も、みずからの力で九州の寄留地を確保したのであろう。

小さな品々の交換から、大きな品々の交換に拡大したにちがいない。そのうちに、ヒスイや碧玉などの貴重品と青銅器製品などとの交換も行われ、織物や水産加工物、食糧品などの商取引も行われたであろう。

専門の玉づくり職人たちも、九州で現地生産を行った。

以前紹介した北九州市の城野遺跡の玉づくり工房跡(小倉南区城野)は、出雲の玉づくり職人たちの九州における拠点集落の一つであった可能性が高い。

伊都国(糸島市)の「潤地頭給(うるうじとうきゅう)遺跡」も、そのような玉づくり工房遺跡である。

潤地頭給遺跡は、糸島半島のほぼ中央部、旧今津湾近くの標高 3~4 メートルの南北に延びる微高地上に所在する。



小学校建設工事に伴い、平成 14～15 年度発掘調査が行われ、弥生時代から中世にかけての長期にわたる遺跡であることが判明した。

弥生時代中期を中心とするカメ棺墓 370 基と掘立柱建物群、弥生時代終末～古墳時代初頭の大規模な玉造り工房群、古墳時代中期の住居群、奈良時代の集落等である。

とりわけ、玉造り工房関連の遺構が、初めて九州で確認されたことが重要である。

南北 130 メートル、東西 80 メートル、面積 9,600 平方メートルという広大な面積で、工房は 33 軒に及び、弥生時代後期後半から始まり、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて最盛期を迎えた(西谷正編『伊都国の研究』学生社・2012)。

工房内からは、玉の未製品や加工用の工具類なども出土している。

原材料は、碧玉、水晶、メノウなどで、碧玉から管玉、水晶から算盤玉や切子玉など、数種類の石材でさまざまな製品を製作していたことがわかった。

工房の形態はほとんどが方形の竪穴式住居で、工房の周囲に円形の排水溝をめぐらし、傾斜に沿って谷へ流す構造になっていた。

排水溝内には土器類のほか、水晶剥片や碧玉剥片、砥石などが含まれていることから、玉づくりの過程で生じる不用物を水で流し落としていたことがわかる。

碧玉は出雲の花仙山(島根県松江市玉湯町玉造)の産ということが判明している(藁科 2011)ほか山陰系甑形土器や山陰産二十口縁壺が出土していることから、出雲地方からやってきた渡り職人たちの工房であった可能性が高い。

この玉づくり工房遺跡の発見により、伊都国内の今宿五郎江遺跡や一の町遺跡、三雲・井原遺跡などにおいても玉づくりが行われていた可能性が浮上している。

また、奴国が所在していた福岡平野の西新町遺跡、博多遺跡群、比恵遺跡、箱崎遺跡、三苦永浦遺跡などにおいても玉づくりが行われていたとみられている。

すでに紹介した城野遺跡(北九州市小倉南区城野)からも、碧玉(出雲花仙山産)・ヒスイ(糸魚川産)・水晶・メノウなどの玉作り工房を含む集落が確認されている。

花仙山の碧玉が確認されていることから、これまた出雲の渡り職人たちの集落であった可能性もあり得よう。

いずれにしても、【九州—出雲—糸魚川】という日本海を介した人的な交流が存在したことは確実である。

出雲へ

朝鮮から九州へ帰還したスサノオと五十猛命は、出雲へ向かった。

五十猛命の妹の大屋津(おおやつ)姫命と爪津(つまつ)姫命の二人も、おそらく同行したであろう。兄の五十猛命とともに、各地で植林したような伝承が残されているからである。

加えて、かなりの部下たちも引き連れていたのではないか。

出雲出身の王族とはいえ、父イザナギに連れられて九州に渡ったスサノオには、出雲における確たる地盤はなかったはずである。出雲を制圧するには、武力が必須要件であった。スサノオは一族

郎党を率いて、出雲に向かったはずである。

『魏志倭人伝』の「女王国の東、海を渡りて千余里、復(ま)た国あり。皆、倭種なり」とあるが、九州島の東方向にある本州・四国をさすのであろう。

九州と海で隔てられているのは、本州と四国である。

なお、『魏志倭人伝』の対馬から末盧国までの海路については、次のとおり。

狗邪韓国	対馬	壹岐	末盧国	合計/平均
金海→鰐浦 1,000 里(約 62 km)	豆敷→勝本 1,000 里(約 52 km)	印通寺→呼子 1,000 里(約 25 km)		3,000 里 = 139 km
1 里 = 約 62m	1 里 = 約 52m	1 里 = 約 25m		1 里 = 約 46m

1 里 = 約 46m という結果をもとに、北九州市の洞海湾から日本海側の出雲まで約 250 キロメートルを里に換算すると約 5,400 里となり、洞海湾から瀬戸内海を通って大阪まで約 450 キロメートルは約 9,800 里となってしまふ。

したがって、『魏志倭人伝』の「海を渡りて千余里」は、出雲でもなく、近畿でもないということになる。

出雲への海路

宗像あるいは遠賀川河口から響灘を東北に進むと約 50 キロで油谷湾(山口県長門市)に着く。

『魏志倭人伝』のほぼ 1,000 里の距離である。

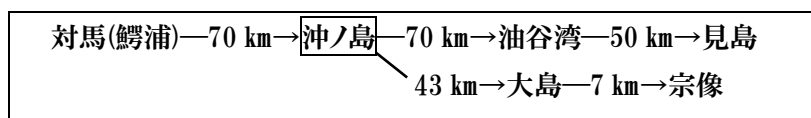
『魏志倭人伝』の「海を渡りて千余里」というのは、この油谷湾あたりのクニを指している可能性がある。

油谷湾からは見島(山口県萩市)へ向かう。

萩市の北西約 45 キロメートルの日本海にある島で、山口県最北端の島である。

見島から直接朝鮮に向かうのは、対馬海流に押し戻されるために難しいが、朝鮮半島からの帰路であれば、対馬海流の流れを利用することができる。

金海から対馬(鰐浦)→沖ノ島→油谷湾→見島という対馬海流に乗ったコースで、わりと安全に日本に帰還することができる。



朝鮮方面からの攻撃に備えるため、奈良時代に防人が配置されたことも頷ける。

見島には、ジーコンボ古墳群がある。島東南部の横浦海岸一帯に所在する約 200 基の積石塚群のことである。7 世紀～10 世紀ごろとみられるこの古墳群は、指揮官クラスか防人の墓ではないかと考えられている。

ジーコンボの由来については、台湾語で共同墓地を意味する「地公墓」に由来するという説と、じいさんを意味する「ジーコー」という島の方言に由来するという説がある。

地理的・歴史的にみて台湾語由来説には無理があり、見島方言説が妥当であろう。

対馬海流の影響で瀬戸内側よりも平均気温が高く、山口県内では最も暖かい地域のひとつである。ただし、冬季には北からの季節風が直接当たるため、体感温度はかなり厳しいという。

本村(ほんむら)集落北西の高地に見島神社があり、祭神は応神天皇・神功皇后・仲哀天皇・武内宿禰および住吉三神(表筒男命・中筒男命・底筒男命)である。

最も古いのはもちろんイザナギの禊によって生じた住吉三神で、出雲系の神々が祭られていないことから、九州の海人族系の島であったことがわかる。





なお、応神天皇・神功皇后・仲哀天皇・武内宿禰は、後世付加された祭神である。

神功皇后と仲哀天皇は武内宿禰らを伴って九州に下向した。朝鮮出兵後に宇美八幡宮の地で生まれたのが応神天皇である。山口県には、忌宮神社(豊浦宮・下関市長府)や住吉神社(下関市一の宮)などゆかりの神社も少なくない。拙著の『神功皇后の謎を解く』(原書房)に詳説しているので参照されたい。

見島から東方の出雲まで、約 150 キロメートル。海路 2 日の距離である。

浜田(島根県浜田市)あたりに一泊すれば、次の日には出雲に到着することができる。

宗像から 4 日の距離である。博多湾からは 5 日程度の距離ということになる。

(以下、つづく)

【これまで季刊「古代史ネット」に掲載された河村哲夫氏の論文】

季刊「古代史ネット」	日本古代通史・連載回数	テーマ
創刊号(2020年12月)	第1回【プロローグ】	【Ⅰ】卑弥呼の鏡 【Ⅱ】天照大神の鏡
第2号(2021年3月)	第2回【奴国の時代①】	【Ⅰ】邪馬台国前史としての奴国 【Ⅱ】高天原の神々
第3号(2021年6月)	第3回【奴国の時代②】	朝鮮半島南部の倭人の痕跡
	第4回【奴国の時代③】	北部九州のクニグニ
第4号(2021年9月)	第5回【奴国の時代④】	奴国の神々
第5号(2021年12月)	第6回【邪馬台国の時代①】	卑弥呼の登場
第6号(2022年3月)	第7回【邪馬台国の時代②】	卑弥呼の外交①
第7号(2022年6月)	第8回【邪馬台国の時代③】	卑弥呼の外交②
第8号(2022年9月)	第9回【邪馬台国の時代④】	邪馬台国への道・三韓諸国
	第10回【邪馬台国の時代⑤】	邪馬台国への道・対馬と壱岐
第9号(2022年12月)	第11回【邪馬台国の時代⑥】	末盧国と西海の島々
	第12回【邪馬台国の時代⑦】	末盧国から伊都国へ
第10号(2023年3月)	第13回【邪馬台国の時代⑧】	伊都国から奴国へ
第11号(2023年6月)	第14回【邪馬台国の時代⑨】	奴国から不弥国へ
	第15回【邪馬台国の時代⑩】	夜須をゆく
	第16回【邪馬台国の時代⑪】	朝倉をゆく
	第17回【邪馬台国の時代⑫】	日田をゆく
第12号(2023年9月)	第18回【邪馬台国の時代⑬】	投馬国は豊の国
	第19回【邪馬台国の時代⑭】	狗奴国は肥の国
	第20回【邪馬台国の時代⑮】	狗奴国と卑弥呼の死
	第21回【邪馬台国の時代⑯】	卑弥呼と台与
第13号(2023年12月)	第22回【後期・邪馬台国の時代①】	英彦山と京都平野
	第23回【後期・邪馬台国の時代②】	神夏磯媛と豊比売命
	第24回【後期・邪馬台国の時代③】	英彦山と宗像
	第25回【後期・邪馬台国の時代④】	ニギハヤヒ
第14号(2024年3月) 3論文一挙掲載！	第26回【後期・邪馬台国の時代⑤】	スサノオと五十猛命
	第27回【後期・邪馬台国の時代⑥】	出雲の神々
	第28回【後期・邪馬台国の時代⑦】	スサノオとクシナダヒメ